台大日本語文研究第 39 期
2020 年 06 月，頁 27-48
2020-03-16 收稿，2020-06-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202006_(39).0002

全球時代視域下的生態女性主義視點閱讀多和田葉子《在地球各角落發光發亮》：提示共築無國界的新夢想

曾秋桂*

摘要

《獻燈使》自榮獲 2018 年度日本國際交流基金賞、11 月美國全美圖書賞之後，作家多和田葉子更受到世界的矚目。

繼《獻燈使》之後發表的《在地球各角落發光發亮》作品中所提及的多國籍多語言、全球化時代的世界觀、地球温暖化等，可以清楚看出作者透過該作品欲描繪全球化時代的意圖。於是本論文聚焦於全球化時代下「難民問題」、「言語問題」、「擁有高度技術・文明的日本國滅亡」、「環境保護」等現象，從全球時代視域下的生態女性主義視點來論述《在地球各角落發光發亮》，探索隱藏於全球化時代下此諸現象的真義。

考察結果顯示：《在地球各角落發光發亮》作品中，對於因人類的貪求無厭所造成的利害關係、國家間的利益交換、破壞大自然秩序的地球環境嚴峻問題等諸如此類產出壓榨之支配關係，進行了批判跟檢討。同時《在地球各角落發光發亮》中也提出了生活在同一個星球的地球人概念以及生靈平等想法。後者明確提示了共築無國界的新夢想之可能性。特別是當今國界幾乎蕩然無存的全球化時代中，此意義更是非凡。而共築跨越強國支配弱國的暴力、人類支配大自然的暴力等的新夢想，此想法正是《在地球各角落發光發亮》作品所蘊含的深遠意義。

關鍵詞：全球化時代、生態女性主義、《在地球各角落發光發亮》、無國界、共築新夢想

* 淡江大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Reading Yoko Tawada's "Chikyu ni chribamerarete" from the perspective of ecofeminism in the global era,: Fostering new dreams without borders

Tseng Chiu Kuei*

Abstract

Yoko Tawada has gained more and more attention from around the world since "The Emissary" was awarded the Japan Foundation Award 2018 and the US National Book Award in November of the same year.

The multinational multilingualism, the worldview of the global era, and the environmental issues of global warming, which are described in "Chikyu ni chribamerarete", published after the "The Emissary", indicate the intention of drawing the global era. In this paper, we focus on the issues of "refugee issues", "language issues", "destruction of Japan with advanced technology and civilization", and "environmental protection" that we drew in our works in the global era. From a feminist point of view, we try to read "Chikyu ni chribamerarete" and explore the true meaning behind the phenomena in this novel.

As a result of this consideration, the dominant relations that produce repression, such as the interests created by human greed, the exchange of interests between nations, and the seriousness of the global environment that has disrupted the natural world, should be re-examined. On the other hand, Studded with the Earth suggests the concept of an Earthling living on a single planet and the possibility of fostering new dreams without borders, such as the concept of bioequality. Especially in the global era, there is no border, and the meaning of "Chikyu ni chribamerarete" has a large meaning in fostering new dreams of

* Professor, Department of Japanese Language and Literature, Tamkang University

臺灣大學學術期刊資料庫

overcoming violent and weak minority control by a powerful country and violent natural control by humans.

Key words: global era, “The Emissary”, “Chikyu ni chribamerarete”,
no border, fostering new dreams

臺灣大學學術期刊資料庫

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子『地球にちりばめられて』
—国境無き新しい夢を育むことへの示唆—

曾秋桂*

要旨

『献灯使』が 2018 年度日本国際交流基金賞、同年 11 月にアメリカの全米図書賞を受賞してから、作家多和田葉子は世界からますます注目されるようになった。

『献灯使』の後に発表された『地球にちりばめられて』に描いた多国籍多言語、グローバル時代の世界観、地球温暖化の環境課題からは、グローバル時代を描く意図が読み取れる。そこで、本論文では、グローバル時代において作品に描いた「難民問題」、「言語問題」、「高度技術・文明を持つ日本国の消滅」、「環境保護」の事象に注目し、グローバル時代のエコフェミニズムの視点から、『地球にちりばめられて』の読解を試み、その諸事象に潜んだ真意を探ってみることにした。

考察した結果、人間の貪欲によって生み出された利害関係、国家間の利益交換、自然界の秩序を乱した地球環境の深刻さなどの、抑圧を生産する支配関係を問い直されるべきである。その一方で、『地球にちりばめられて』では、一つの惑星で暮らす地球人の概念と、生類平等の考え方のような国境無き新しい夢を育むことの可能性も示唆されている。特に、グローバル時代において、国境が無きこと同然となり、強国による暴力的弱小国支配、人間による暴力的自然支配を乗り越えようとする新しい夢を育む上で、『地球にちりばめられて』が持つ意味は非常に大きい。

* 淡江大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

キーワード：グローバル時代、エコフェミニズム、『地球にちりばめられて』、国境の無き、新しい夢を育む

臺灣大學學術期刊資料庫

グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子『地球にちりばめられて』
—国境無き新しい夢を育むことへの示唆—

曾秋桂

一、はじめに

東日本大震災(2011.3.11)後、越境作家として名高い多和田葉子は、「不死の島」(2012.鈴木哲発行『それでも三月は、また』に収録、講談社)を発表し、原発問題を取り扱った。その後、「不死の島」を収録した『献灯使』(計5短篇、2014年、講談社)により、2018年度国際交流基金賞を受賞した。同じく2018年11月にアメリカで最も権威のある全米図書賞(翻訳文学部門、英語版 "The Emissary")も獲得し、日本の文学作品として36年ぶりの受賞となるそうである[1]。東日本大震災(2011.3.11)後、原発に関心を強く持ち続けている[2]多和田葉子の『献灯使』の授賞歴から見ても分かるように、作家多和田葉子が国際社会から脚光を一層浴びるようになった。

その後、刊行した『地球にちりばめられて』(2016年『群像』雑誌掲載、2018年、講談社)は、また一傑作として見てよい。10章に分けて構成されている『地球にちりばめられて』の各章の語り手が、デンマーク人(2名)、日本人(2名)、インド人、ドイツ人のように違った国籍を持つ人である。また、登場人物らがコミュニケーションに使う言語がパンスカ語(人工語)、デンマーク語、マラーティー語、ドイツ語、英語、フランス語、ノルウェー語などである。このような多国籍多言語を描いた作品では、クヌートが「僕らはみんな、一つのボールの上で暮らしている」(P116)と言ったように、多国籍多言語を背景に持った登場人物にも関わらず、彼らを「地球人」(P41)

1 https://gendai.ismedia.jp/articles/-/58959(2020年6月4日閲覧)
2 多和田葉子・ロバートキャベル対談(2015)「やがて希望は戻る—旅立つ『献灯使』たち」『群像』1月号講談社P224では、「全然違うテーマを考えていても、震災抜きでは今の日本は書けない」と述べている。

臺灣大學圖書館

として見ているグローバル時代の世界観が窺われる。これも作品空間をコペンハーゲン、オーデンセ、トリアー、オスロー、アルルへと広地域を移動することからも分かる。そして、作品では、「地球の温暖化で水位があがると、平たくなった島全体が太平洋に沈んでしまった」(P27)と女主人公 Hiruko が語ったように、母国日本が消滅したという設定になっており、地球温暖化の環境課題も盛り込まれている。上述の、多国籍多言語、グローバル時代の世界観、地球温暖化の環境課題の特色から見れば、『地球にちりばめられて』は、グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読むに値する好材料だと言ってもよかろう。

そこで、本論文では、エコフェミニズムの視点から『地球にちりばめられて』を試み、そこに描いたグローバル時代の諸事象の真意を探ってみようとするのである。

二、エコフェミニズム(eco-feminism)[3]の概念

エコフェミニズム(eco-feminism)はエコロジカル(ecological)とフェミニズム(feminism)を組み合わせて出来た言葉で、1974 年に環境革新を先導する女性たちに呼びかけたフランスのフランソワーズ・ドゥボンヌによって命名された用語である。人間による自然の支配と男性による女性の支配には重要な関係があるという洞察から、新しい自然と人間の関係、女性と男性の関係を求める思想として、アメリカで一層発展したそうである[4]。

多岐に発展してきたエコフェミニズム(eco-feminism)について、渡久山清美・渡久山幸功が「男性による女性支配(女性への抑圧構造)と人間による自然支配(自然・生態系に対する抑圧構造)は、同一の社会システム、資本主義家父長制あるいは開発家父長制という男性権力構造に起因する」[5]ことに注目し、「男性社会が作り上げた、こ

[3] エコフェミニズムに関する記述は、詳しく曾秋桂「エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』」(2018)『台湾日本語教育論文集』第 30 号 台湾日語教育学会 P186-204 を参照されたい。

[4] 井上輝子・上野千鶴子代表編(2000)『岩波女性学事典』岩波書店 P44。

[5] 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考一開発資本主義家父

臺灣大學期刊資料庫

の支配の構造それ自体を解消しないかぎり、環境問題も、女性支配もなくならない」[6]とする森岡正博の政治思想概念に触れ[7]、より広い視野で、「真の意味での社会変革を実現するために必要とされるエコフェミニズムは、女性だけではなく男性にも開かれているという認識を持って、脱男制的な男性、つまり、ステレオタイプ的な男性像を追い求めることのない、エコフェミニズム的思考を擁する男性[8]をエコフェミニズム運動に取り込んだり、増やしていくような包括的な理論構築の実践である」[9]と提案した。さらに、「エコフェミニズムは、(自然と女性という)単立した問題についての運動に終始するのではなく、すべての被抑圧集団の解放をめざす思想に至る」と再定義した喜納育江の説[10]を取り入れた渡久山清美・渡久山幸功は、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直すのがエコフェミニズムの基本思考であり、特に、グローバル化が進む経済構造や生態系の環境問題の時代を迎えた 21 世紀の現在、このような認識を極めて有効な概念であろう」[11]と帰結した。

そこで、本論文では、渡久山清美・渡久山幸功が広汎に下した「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことをエコフェミニズムの定義・指針とするのである。以下、それに基づき、『地球にちりばめられて』を考察し、作品に描かれたグローバル時代の諸事象の真意を探ることにする。

長制に対するオルタナティブな理論としてー」『人間学科』29 号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

6 森岡正博(1995)「エコロジーと女性—エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会 P152。

7 渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考一開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論としてー」『人間学科』29 号琉球大学法文学部人間科学科 P156。

8 山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性—C・マーチャントを手がかりに—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 10 巻 1 号宮崎公立大学人文学部 P315 で触れた長年原子力問題に取り組んできた高木仁三郎がその好例である。

9 同注 4、P176。

10 喜納育江(2011)『<故郷>のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社 P152。

11 同注 4、P171。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、『地球にちりばめられて』に描いたグローバル時代の諸事象の真意

次に『地球にちりばめられて』の粗筋を述べた後、作品に描いたグローバル時代の諸事象をピックアップし、その真意を分析、考察しようとする。

（一）『地球にちりばめられて』の粗筋

作中時間が作品発表時の 2016 年に想定してよい[12]が、「一年の予定でヨーロッパに留学し、あと二ヶ月で帰国という時に、自分の国が消えてしまって、家に帰ることができなくなってしまった」(P9)、「鮨の国」(P100)の日本国籍[13]を持つ 20 代[14]の女主人公 Hiruko が、自分と同じ言語を使っている同郷人を探すためにテレビ番組に出た。言語学者のデンマーク青年のクーヌトがその番組を見て、放送後 Hiruko と会った。その後、クーヌトが同郷人探しの旅に出る Hiruko に付き添い、「旨味フェスティバル」(P56)の開催地ドイツのトリアーに、演出者の、「鮨の国」(P100)の人らしき「Tenzo」(P56)という人に会いに行った。そこでインド人アカッシュとドイツ人ノラとも知り合った。そして、ノラからはオスローで開催する料理人のコンペティションに行っているテンゾ(Tenzo、ナヌークのこと)が戻れないため、フェスティバルが中止されたと告げられた。その後、Hiruko 一行がテンゾの後を追って、オスローに行った。オスローで会ったテンゾから、自分が Hiruko の同郷人ではなく、グリーンランドの出身者を打ち明けられた。と同時にかつてフーズムにある鮨屋で働いた時に聞いた、Hiruko と同郷人らしき Susanoo[15]が今南フランスのア

---

[12] 曾秋桂(2019)「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』―日本が消滅したことの真意について」『台湾日本語教育論文集』第 33 号台湾日語教育学会 P201 を参照されたい。

[13] 作品では「日本」とは名指していないが、「中国大陸とポリネシアの間に浮かぶ列島」(P9)、「北越」(P22)、「新潟県」(P22)、「福井」(P227)とあることから、日本のことが想定されよう。

[14] 同注 12、P208。

[15] 同注 12、P208。なお、「福井県原子力環境監視センター」と「福井原子力センター あっとほうむ」のサイト http://www.houshasen.tsuruga.fukui.jp/pages/radiation/plant/plant2.html、http://www.athome.tsuruga.fukui.jp/business/outline/index.html(2020 年 2 月 18 日閲覧)によると、Susanoo の故郷福井に原子力発電所が 1970 年に初導入され、1972 年に原子力センターが開館された。

臺灣大學日語文學研究會

ルルにいるという噂もテンゾが伝えた。すると、Hiruko 一行の 5 人がまた Susanoo 探しの旅に出た。アルルで Susanoo には会ったが、失語症に罹っている Susanoo とは言葉でコミュニケーションできなかった。終盤では、アッカシュが Susanoo の唇の動きを読み取って、Susanoo に「君は失語症の研究所に行ってみたいんだね。君が行きたいなら僕もいっしょに行くよ」(P308)と言った後、Hiruko が「これは旅。だから続ける」(P309)と言って、作品は終わりについた。ちなみに、作者多和田葉子は『地球にちりばめられて』の続編があると主張した[16]ため、2019 年 1 月から『群像』(七十四巻)に連載し続けている『星に仄めかされて』がその続編と見てよい。

作品には、グローバル時代において、関わりのある事象が多く描かれている。それを「難民問題」、「言語問題」、「高度技術・文明を持つ日本国の消滅」、「環境保護」の四点に纏めることができる。以下、その諸事象を順次に見てみよう。

（二）難民問題——地球人の概念を提起

「国が消えてしま」(P9)うことを理由に Hiruko が難民となった。作品中、メルヘン・センターで語り部として移民に教える Hiruko が見た限り、「彼らは戦火や弾圧を逃れて逃げてくるのであって、貧しいから逃げてくるわけではない」(P41-42、下線部分は論者による。以下同様)こともある。これと同じく、出身地のグリーンランドに移住した人を見たナヌークは、「彼らは戦火を逃れて遠い北アフリカからデンマークまで逃げてきた」(P119)と言った。要するに、国の消滅あるいは戦争、弾圧、いわば人為的な政治要素のために、難民を生み出したことになったのである。

こういった難民・移民が、Hiruko の語ったように、「最近の移民はほとんど流浪の民になっています」(P11)の取り扱いを受けている。また、「アメリカは(中略)英語が話せて、手先の器用な移民を世界中

[16] 週刊読書人ウェブ多和田葉子(作家) 郷原佳以（東京大学准教授）(2019 年 5 月 18 第 3239 号)「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」(第 2 回 Hiruko は流れ続ける運命) https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3(2020 年 2 月 18 日閲覧)

臺灣大學日本語文學系

から集めようとあせっている。一方ヨーロッパでは、移民を含むすべての国民に完全な生活保障を与える制度ができたのはいいが、国家予算が足りなくなってきているので、英語ができる外国人はできればアメリカに移ってほしい」(P61)という現状に直面しなければならない。アメリカ行きについては、Hiruko も「持病があるので、保険制度の未発達な国では暮らせません」(P11)と断念し、「英語が話せるならアメリカへ移住」(P60)させられることを恐れ、公の場合で小さい声で英語を話している。「アメリカ転送政策」(P60)のような、国と国との間で絡む利益により、共通言語としての英語使用が皮肉にも不利になることに至っている。

難民になった Hiruko は、移民の不法滞在のことについて、「わたし自身がすぐに「不法滞在の外国人」になってしまう。よく考えてみると地球人なのだから、地上に違法滞在するということはありえない。(中略)このまま行くと、そのうち、人類全体が不法滞在していることになってしまう」(P41)と異議を唱えており、地球人の概念に基づき、難民の不法滞在の考え方を訂正すべきだと見て取れよう。

（三）言語問題—言語使用の混同ないし融合、そして文化伝承

次に移民、難民に伴う言語の問題を見よう。

母国が消えて悲しくなり、同じ言語使用者を探す Hiruko を、クヌートが「君たちの言語に存在したあらゆる単語を。それから辞書をつくるんだ」(P62)と慰めた如く、一国の言語の消滅は確かに一国の命脈の存続に繋がるほど大事なことに違いない。しかし、Hiruko が「移民が一つの国に永遠に滞在できるようになるのかどうか不明」(P20)な状況に置かれ、「わたしは経験した国はたった三つです。でも三つの言語を短期間で勉強して、混乱しないように使うのは大変です」(P11)と、他言語をマスターする大変さを語っている。また、Hiruko は、「わたしたちはいつまでも移動を続ける。だから、通り過ぎる風景がすべて混ざり合った風のような言葉を話す」(P38)と移民について感無量に感じ、「この言語はスカンジナビアなどの国に行っても通じる人工語で、自分では密かに「パンスカ」と読んでいる。

臺灣大學學術期刊資料庫

「汎」という意味の「パン」に「スカンジナビア」の「スカ」を付けた」(P37)と自分で人工語を作っている。しかし、この人工語を方言と定められる恐れのあることを感知し、「ある言葉が独立した言語なのか方言なのかを定義する場合、政治的意図が働いていることが多い」(P68)と政治的干渉をある程度 Hiruko が意識している。このように、一国の言語(日本語)のルーツを懸命に探す一方、難民の共通語としての「パンスカ」の構築を発想すると共に政治的要素の介入をも意識していると言えよう。

また、言語使用とアイデンティティについては、「語学を勉強することで第二のアイデンティティが獲得できる」(P140)とナヌークが言ったことがある。そして、言語学者のクヌートが「ネイティブは魂と言語がぴったり一致していると信じている人もまだいる」(P210)ことに注目し、それを「迷信」(P210)だとし、「ネイティブは日常、非日常ネイティブはユートピア」(P220)と、ネイティブが話す言語が日常であるのに対して、非ネイティブが話す言語が非日常で、日常に違反する全くの価値のないものではなく、ユートピアのもう一つ価値系を生み出すことになると示唆している。これはグローバル時代においての先見の明だと肯定されよう。

さらに、常に流動性を持つ言語使用の特徴は、本作品からも窺われる。語源については、Hiruko が「「マッチャ」は「Macho」と同じでスペイン語からきている」(P28)というクーヌトの説に異論を示したり、コスプレが英語だという説に「コスプレは、わたしの生まれ育った国でできた言葉」(P30)と主張したりした。また、アカッシュと「オショウ」が固有名詞か普通名詞か(P71)をめぐって論争を繰り返した。各自の主張はあったが、これは、言語使用上の混同ないし融和をする現象として認められよう。

さらに、語源を超える文化浸透については、鮨がフィンランド料理かどうかについては Hiruko とクヌートとの意見齟齬(P18)、パスタがイタリア料理かアジア料理かに対するアカッシュの困惑(P74)も描かれている。これは、日本人を偽っているナヌークが、鮨屋で

臺灣大學學術期刊資料庫

出会った英語で鮨職人が交わした会話から回答を求められる。ナヌークが働いた鮨屋で勤めた職人が「俺はアメリカ人、あいつはベトナム人」(P139)と出自を表明した場面、また、「鮨の握り方やおいしい味噌汁の出汁のとり方や完璧な揚げ出し豆腐のつくり方」(P141)をする「福建省出身の料理人チョウ」(P141)に教えたのは、「パリのホテルに勤めるフランス人」(P141)であったことからは、鮨文化を伝承する役割を果たしたのは、日本人以外の外国人である。それはまさに福建省出身の料理人チョウが言った「オリジナルが消滅した後は最上のコピーを捜す以外に方法はない」(P141)の通り、文化が交差するグローバル時代においては、消滅した一国に代わってその国の文化を伝承していく役目がその国の文化精髄を得体し、価値を認める異なった国の人に任せる、という事象が生じたのである。これは国という枠を超えて文化が浸透する力の大きさを物語っている。と共に前述の地球人の概念と呼応している。

上述のように、言語使用の混同ないし融合、そして文化浸透・文化伝承は、いずれも交流が進んでいるグローバル時代に生じた事象であり、避けて通れない問題である。国家間あるいは政治的干渉があるにしても、ネイティブと非ネイティブに拘る必要はなく、地球人の概念に基づいた新しい生き方をするといった夢を育むものになろう。

（四）高度技術・原子力発電技術を持つ日本国の消滅—過度開発、放射線問題の指摘

作品では日本が消滅したと設定された。日本の消滅については、20代のHirukoと同世代の人[17]がSusanooの友人ヴォルフと一緒にフーズムで開いた鮨屋が既にヴォルフの孫の世代になった時点、いわば2016年の時点で日本国が消滅したと言っている。それに対して、

[17] 20代のHirukoと同世代の人、アカッシュ(P60)、クヌート(P62)、ナヌーク(P147)、ウォルフの孫(P147)が出した説が凡て国が消えたことに集中している。その中で当事者Hirukoが言った太平洋沈没説(P26-27)が一番具体である。一方、60代のSusanooと同年代のアンケがSusanooが家族との連絡が途絶えた理由に「大惨事」(P246)が挙げられる。その「大惨事」は多分東日本大震災であろう。

臺灣大學學術期刊論文

60 代の Susanoo と同世代のアンケが Susanoo の友人ヴォルフと一緒にフーズムで開いた初代鮨屋の時点、「大惨事」(P246)と言っている。要するに日本の消滅と「大惨事」とは別々の事件を指すはずである。いわば、同じく北陸出身の 20 代の Hiruko と 60 代の Susanoo が同様に母国との連絡が途絶えたことに出遭ったが、作品の表面には少しも触れられていないが、作品時間 2016 年の時点で推測すると、「大惨事」は東日本大震災のことを指す可能性が高かろう。再度強調するが、20 代の Hiruko は東日本大震災後に、60 代の Susanoo は東日本大震災前に外国に出たのである。以下、日本国籍を持っている Hiruko と Susanoo が触れた母国日本のことを見てみよう。

1. Hiruko が触れた日本

東日本大震災後に外国に出た「新潟県」(P22)出身の Hiruko が、放射線のことに一切に触れていないが、「わたしの生まれ育った国では、かなり昔からすでに性ホルモンがほとんど消滅していた」(P47)、「文化の中に性ホルモンがない」(P48)と述べたように、性的ホルモンの変化が『献灯使』(2014)で触れた放射線から受けた影響の一種[18]である。この点については、Susanoo が語ったことの重点と重なっている。Hiruko が放射線のことを直接的に切り出す代わりに、「生まれ育った村は、ハイテクな土地柄」(P21)を強調している。例えば、「雪が降り出すと道に埋められたセンサーが感知して、道路に開けられた穴から温水が吹き出してきたそうだ。この温水は温泉から引いてきたものらしい。だから雪が道路に積もることがない」(P21)と語ったように積雪をなくす消雪パイプに触れている。消雪パイプの発祥地は新潟県長岡市にあり、昭和 36 年に初導入され、昭和 39 年に実用新案権を登録され、昭和 44 年に全国の雪国に広がっていく[19]という。また、故郷の親が「ナビゲーション・システムの付いたか

[18] 多和田葉子(2014)『献灯使』講談社に収めた短篇「献灯使」P107 では、放射能の影響で過酷した環境に積極的に適応し、生き残るために「誰でも人生のうち必ず一度か二度は性の転換が起こるようになったのも自然の策略の一つだろう」とある。

[19] 長岡市のホームページから検索した「雪パイプ」の項目
https://na-nagaoka.jp/nagaoka/9368(2020 年 2 月 18 日閲覧)

臺灣大學學術期刊資料庫

んじきを子どもにはかせて遊びに出す」(P25)とあるように、縄文時代からあったかんじきをさらに、「ナビゲーション・システムの付いた」ものだけではなく、「道を教えてくれたり、雪の下が空洞になっている危ない場所を教えてくれたりするだけではなく、会話機能も付いていた」(P25)と改良したハイテクのものに触れている。

故郷を自慢する一方、その日本の消滅を「自分の田舎を田舎でなくすことに人生を賭けてとんでもないことをしでかした男」(P26)と関連つけた。その男が「共産圏から吹いてくる湿度の高い冬の風が山にあたって雪が降ることもなくなる」(P27)ことを目的に、「自分の生まれた土地を首都圏の一部にしようとして、間にまたがる山脈をブルドーザーで削ってしまおうとした」(P27)。それ故、「地球の温暖化で水位があがると、平たくなった島全体が太平洋に沈んでしまった。そういう筋書きでわたしの国がなくなってしまったということもありうる」(P27)と Hiruko が国が消滅した理由を語っている。ちなみに、ここで言った政治家は田中角栄のことで、1946 年の衆議院総選挙に出た時、「三国峠を崩せば新潟に雪は降らなくなり、崩した土砂で日本海を埋めて佐渡まで陸続きにすればよい」と演説したセリフ[20]が連想される。Hiruko が日本の消滅を田中角栄の過度開発に関連させた説は、事実とはかなり違うが、それはそれとして、過度開発したため、日本国が消滅したと Hiruko が見ている。

2. Susanoo が触れた日本

東日本大震災前にドイツに出た「福井」(P227)出身の Susanoo が、自分の故郷を主に「電気の銀座」(P229)とされた原子力発電所に触れている。

Susanoo の父が「故郷 PR センター」で展示するロボット作りを仕事に持っている。作品中、Susanoo が 2 回ほど「故郷 PR センター」へ行ったと描かれている。「小学校の課外授業」(P227)のために初めて行った時、「やがて停滞していた我が国の経済は回復し始め、(中

[20] 早野透(2012)『田中角栄』中央公論新社 P67-71

臺灣大學學術期刊資料庫

略)長い間忘れられてた発電所が再稼動されることになった。しかも発電所はひとつじゃない。この地方は大昔は電気の銀座とまで呼ばれていた。わたしたちはどれほど嬉しかったことか」(P229)と原子力発電所の設置を自慢話にしたロボットのカクさんのセリフを聞かされた。その時「しらけた雰囲気が広がりがち」(P229)と Susanoo が感じたが、「遠い親戚の小学生」(P227)に付き添いに 2 回目に行った時、「発電所の安全性は何度も厳重にチェックされ、再稼動が始まったんだ。それ以来、わたしたちの暮らす地域の経済は安定している」(P237)というロボットのカクさんのセリフを聞くと、Susanoo が「驚い」(P237)て、「本当に安全なのか」(P237)とその事実を疑うようになった。大学進路を選択する際に、ロボット作りの父が Susanoo「おめえはロボットは造るな」(P242)、「カクさんが子どもたちに伝えてきたこと。あれは嘘だ。ロボットだから平気な顔で嘘をつけるんだ」(P242)と戒めてくれた。作品中、第五章では、Susanoo が語る以外、ナヌークの語りには、Susanoo に関するエピソードが入っている。「Susanoo の故郷は昔は海の幸で有名で、(中略)その海岸線はいつの間にか不幸な発展をとげて「銀座」と呼ばれるようになり、漁業は衰退した」(P145)とナヌークが語ったことも Susanoo が語ったことも、原子力発電所が過密に造られたという点では相違ない。また、ナヌークが語った「Susanoo は高校生になると、故郷 PR センターに疑問を感じ始めた」(P146)とあるように、上述の 2 回目「故郷 PR センター」に行って Susanoo が示した反応と一致している。このように、Susanoo が原子力発電所に対して不審に思う故、「どんなに心をこめて造っても、人間をだまし、傷つける道具として使われてしまう。そんなロボットをこの世にこれ以上、送り出したくなかった」(P239)と考えて、造船を勉強するためにドイツ留学を決めたのである。そして、留学先に来た Susanoo が大学にも造船にも向いていない自分のことに気づき、その旨の手紙を父に出したが、「返事はなかった。便箋に書いて送っても、電子通信で送っても返事は来なかった。高校時代に汗まみれの楽しい時間を共有した仲間たちからも全

臺灣大學學術期刊資料庫

く連絡がなかった」(P246)とあるように、故郷との連絡が途絶えた。その際、「あなたの国に大惨事が起こって連絡できないんじゃないの」(P247)と恋人のアンケに慰められた。このように、「大惨事」による母国日本が消滅したことに対して、Susanoo の語りではその原因に直接的に触れていないが、その語りの重点は、大半原発銀座とされた故郷に置かれている故、日本消滅した原因の一つとして Susanoo が原発事故を思い当たったに違いない。

要するに、政府主導による高度技術・原子力発電技術が向上した日本国が消滅したことは、Hiruko が指摘した過度開発及び Susanoo が思い当たった原発事故によるものだと推測されよう。

（五）環境保護—生類平等の考え方

環境保護については、下記の 2 点に分けて順番に見てみよう。

1. 動物権利——裏に絡まる不正の発覚

本項目では、魚の痛み加減、鯨料理、闘牛の 3 例を取り上げてみよう。

作品の第一章では、クヌートが Hiruko を誘って鮨を食べる場面で、魚が受けた痛み加減をメニューに表記することについて、「その魚が捕らえられて死んだ時にどのぐらいの痛みを感じたかという度合い。大量漁獲の場合は網の中でのたうちまわって、ゆっくり死ぬ。思いやりのある漁師の一本釣りなら釣ってすぐ頭を打たれて安楽死。お客様には選択の自由がある」(P23)とクヌートが説明した後、さらに、「わが国(デンマーク・論者注)では人権はすでに完璧に守られているので、今度は動物の権利に力を入れているんだ」(P23)デンマークの先進的な考え方に触れた。

次は鯨料理だが、「マグロは絶滅寸前」(P24)を理由に、ノルウェーのオスローで開催する鮨料理人のコンペティションの主催者は、「国際的に活動する自然保護団体」(P186)を怒らせるため、自国のノルウェーの伝統としての鯨料理を出すように考えて、「鯨を食う喜び」(P187)を電子ネットで流したところ、翌日に「鯨の死体」(P187)が海岸に上がっており、警察から「事情聴衆」(P187)を要求された。鯨の

臺灣大學學術期刊資料庫

「購入証明書」(P187)を見せることにより、無事になった。この騒動から 3 点ほどの事柄が発覚される。一つには、事件に立ち会っている若者が言った「海底油田を捜すための船が海底に送るレーザー光線に当たって鯨は死んだのだ、と。この方法は禁止されているはずなのに、国際市場で石油の価格が大幅に下がってきたので政府はあせって石油会社の不正に目をつぶっているのだ」(P190-191)とあるように、政府の不当処置が指摘される。もう一つには、ノルウェー人の主催者が責任逃れをするため、「ノルウェーは国としては捕鯨を許可しているが国際的な批判が強いので、鯨殺しの罪をナヌークになすりつけて、グリーンランドのせいにするのではないか。それでもグローバル経済の犠牲者であるエキスモーが昔の狩猟習慣に例外的に一度だけ戻ってしまったということであれば罪は軽いだろう」(P191)と企んでいる。三つ目には強者による剥奪のグローバル経済のシステムも指摘している。この 3 点からは、表には環境保護団体との見解が対立しているように見えるが、裏には政府の不当処置、個人の責任逃れ、強者による剥奪のグローバル経済のシステムへの摘発が隠されている。

最後は闘牛だが、「アンダルシアから闘牛士が来てサッカー競技場で闘牛が行われるので、自然保護団体が動物虐待に抗議する大規模なデモを計画している」(P248)と、動物虐待を理由に闘牛競技への自然保護団体の抗議だけが触れられている。

上述した魚の痛み加減、鯨料理、闘牛の 3 例からは、動物の権利が主張されつつある風潮があることは否めないが、隠された政府の不当処置、個人の責任逃れ、強者による剥奪のグローバル経済のシステムへの摘発が見逃せない。

2. 環境汚染による人体への影響——異変を引き起こすもと

サーモンを例に人体に与える影響を見てみよう。

第一章ではクヌートが Hiruko を誘って鮨を食べる場面に続き、クヌートが「サーモンの値段が圧倒的に安い。噂によるとバルト海ではサーモン養殖のために繁殖促進剤を撒き過ぎて、増えすぎたサ

臺灣大學圖書館期刊資料庫

ーモンが共食いをしているそうだ。大きくて強い者が生き残るので、身体がどんどん巨大化して、鯨のようなサーモンが海面に飛び上がるのを目撃したという話もある」(P24)と、繁殖促進剤を乱用するせいで、サーモンの増加と巨大化に触れたている。それを人間が食べると、「バルト海のサーモンを食べると生殖能力が以上に刺激され、鮨から家に帰ってすぐ性交したくなるという噂もある。しかも、生まれてくるのは必ず双子か三つ子、時には五つ子を通り越して、何十体もの小さな胎児が魚の目をして子宮内で鰓呼吸している映像もネットで流されている」(P24)と、人体の生殖能力が増強し、異常に繁殖することがある。勿論、異変を引き起こすこともありうるに違いない。このように、繁殖促進剤を撒き過ぎるような不自然な行動を取ると、結局人体に及ぼす影響が人間の想像を遥かに超えて未知なものになる。環境汚染がサークル的に循環して、いずれ人体にふりかかってくる、という地球で生存している生類が皆平等であるという考え方が再度顕わにされる。

本節で「難民問題」、「言語問題」、「高度技術・文明を持つ日本国の消滅」、「環境保護」の四点に纏めたグローバル時代の諸事象を考察した結果、地球人の概念に基づいて、連鎖反応を引き起こす災難を提示する一方、新しい生き方も合わせて示唆してくれていると言えよう。

四、おわりに—国境無き新しい夢を育むことへの示唆

第 2 節で述べたエコフェミニズムの「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことを指針として、『地球にちりばめられて』で描かれたグローバル時代の諸事象を検討した。その考察で明らかになったように、国の消滅あるいは戦争、弾圧、いわば人為的な政治要素のために、難民を生み出した。そして、難民が受けた取り扱いは、国と国との間で絡む利益、時には使用言語によって決められるような不当なことが見られる。さらに、日本のような一国内の事情に目を向けると、政治家が企んだ過度開発及び日政府主導による原

臺灣人學學術期刊資料庫

子力発電技術向上が日本の消滅の引き金に、難民を生み出す原因の一つとなった。このように過度開発による温暖化などの自然環境破壊、そして一国の政治要素・過度開発による難民の産出、さらにそれと絡む国際社会間による各国の利害打算からは、人間と自然との対立構図以外に、強国と弱国との非均衡的な支配関係の一面が浮び上がってくる。エコフェミニズムの視点を通して『地球にちりばめられて』に描かれたグローバル時代の諸事象を見ると、人間の貪欲によって生み出された利害関係、国家間の利益交換、自然界の秩序を乱した地球環境の深刻さがありありと見て取れよう。

また、環境保護の概念が普及しているなか、環境保護団体との見解が対立しているように見えるが、実は政府の不当処置、個人の責任逃れ、強者による剥奪のグローバル経済のシステムへの厳しい指摘がされている。不当な手段による海の資源を搾取すると、受けるべき不利なものが結局人間に返ってくるような、循環的サイクルが起こりうる。強国による暴力的弱国支配、人間による暴力的自然支配は、いずれも抑圧を生産する支配制度から生じたものであり、糾弾し、批判されるべきである。

その糾弾し、批判されるべき事柄がある一方、『地球にちりばめられて』では、一つのボールで暮らす地球人の概念と、生類平等の考え方といったような国境無き新しい夢を育むことの可能性があると示唆されている。特に、グローバル時代において、国境の無きこと同然になり、強国による暴力的弱国支配、人間による暴力的自然支配を乗り越えようとする新しい夢を育む上では、『地球にちりばめられて』が持つ意味は格別である。

【付記】本論文は、107 年度科技部研究計画案(MOST107-2410-H-032-016MY2)による研究成果の一部分である。なお、論者に関する研究業績は https://orcid.org/0000-0002-5093-582X をご参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

【テキスト】

多和田葉子(2018)『地球にちりばめられて』講談社

【参考文献】

【雑誌論文・書籍】

森岡正博(1995)「エコロジーと女性―エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会

井上輝子・上野千鶴子代表編(2000)『岩波女性学事典』岩波書店

山口裕司(2003)「エコフェミニズムの論点とその可能性―C・マーチャントを手がかりに―」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 10 巻 1 号宮崎公立大学人文学部

喜納育江(2011)『<故郷>のトポロジー場所と居場所の環境文学』水声社

早野透(2012)『田中角栄』中央公論新社 P67-71

渡久山清美・渡久山幸功(2013)「エコフェミニズム再考一開発資本主義家父長制に対するオルタナティブな理論としてー」『人間学科』29 号琉球大学法文学部人間科学科

多和田葉子(2014)『献灯使』講談社

多和田葉子(2015)『群像』1 月号講談社

曾秋桂(2018)「エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』」『台湾日本語教育論文集』第 30 号台湾日語教育学会

曾秋桂(2019)「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『地球にちりばめられて』―日本が消滅したことの真意について」『台湾日本語教育論文集』第 33 号台湾日語教育学会

【ネット資料】

http://www.houshasen.tsuruga.fukui.jp/pages/radiation/plant/plant2.html (2020 年 2 月 18 日閲覧)、

http://www.athome.tsuruga.fukui.jp/business/outline/index.html (2020 年 2 月 18 日閲覧)

臺灣大學學術期刊資料庫

https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3
(2020 年 2 月 18 日閲覧)
https://na-nagaoka.jp/nagaoka/9368(2020 年 2 月 18 日閲覧)
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/58959(2020 年 6 月 4 日閲覧)

臺灣大學學術期刊資料庫